

小-30

### 診断にCT検査が有用であった結腸捻転の犬の2例

○竹内恭介<sup>1)</sup> 金 尚昊<sup>2)</sup> 大田 寛<sup>3)</sup> 華園 究<sup>1)</sup> 新坊弦也<sup>1)</sup> 石塚友人<sup>1)</sup> 細谷謙次<sup>2)</sup> 奥村正裕<sup>2)</sup>  
1) 北大附属動物病院 2) 北大獣医外科学 3) 北大獣医内科学

【はじめに】結腸捻転の犬における発生はまれであるが、腸閉塞の原因となり得る疾患である。診断においては造影X線検査の実施が推奨されているが、急速に病態が進行するため、過去の報告では試験開腹にて診断されることが多い。今回、CT検査にて結腸捻転が疑われた症例に遭遇したためその概要を報告する。

【症例1】雑種、3歳齢、未去勢雄、体重16.5kg。5日前より急性の食欲不振と嘔吐を認め近医を受診し、造影X線検査にて原因不明の腸閉塞と診断され本院を紹介来院した。X線検査および超音波検査では原因特定に至らず、CT検査にて結腸は全域で顕著に拡張していた。下行結腸は中央部にて嘴状の狭窄を認め、その後反転して尾側を走行し、上行結腸の左側変位を認めた。狭窄部位では前腸間膜静脈は同心円状に走行していた。これらの所見から下行結腸軸捻転と診断した。外科的整復による術中所見では結腸は全域で顕著に拡張し、色調は暗赤色を呈していた。結腸は結腸間膜根部で反時計周りに約180°捻転していた。用手にて結腸捻転を解除後に色調は正常化し、結腸固定後に閉腹した。術後検査において捻転の原因となる基礎疾患は認めなかった。

【症例2】柴犬、7歳齢、未去勢雄、体重9.7kg。1カ月間持続する食欲不振を主訴に本院を紹介来院した。X線検査、超音波検査にて消化管のび漫性の拡張を認めたが、原因特定に至らず、内視鏡検査を実施した。上部消化管に肉眼病変は認めず、下部消化管の粘膜においてび漫性の暗赤色の斑点状病変が認められたが、観察終了後に病変は消失し、粘膜の色調は正常となった。CT検査では横行結腸は胃の背外側で反転し、その後尾側へ走行していた。前腸間膜静脈の分枝および結腸リンパ節は渦巻状に描出され、さらに前腸管膜静脈は左腎レベルでの途絶を認めた。これらの所見から結腸間膜捻転が示唆された。病理組織学的検査にて、小腸の消化器型リンパ腫と診断された。

【考察】今回の2例では、CT検査にて、結腸の嘴状の狭窄および渦巻状の血管等の特徴的な所見が得られることが示唆され、結腸捻転の診断に有用であると考えられた。結腸捻転の発症には胃拡張捻転症候群や膵外分泌不全、および慢性腸症との関連が報告されており、併発疾患の存在に注意を払う必要があり、これらに加えて腫瘍性疾患も病因となる可能性が示唆された。